

私が最初に本欄を担当した2020年3月は、新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大し始めたときでした。世界中の誰もが日々の生活に大きな変革を迫られ、暗中模索する時期を過ごしました。それから6年、NHKの連続テレビ小説(朝ドラ)では「風、薫る」と題し、実在の女性2人(大関和、鈴木雅)が日本で初めて開設された近代的看護婦養成所に入り、正式な教育を受けた専門職看護婦の資格を得て(1888年)、困難な道を切り拓いていく姿を描いています。皆様ご存知のとおり、この当時すでに崇敬されていたナイチンゲールは19世紀の戦地にて艱難辛苦の末に科学的な医療改革を進め、現在の看護師の祖と呼ばれています。私はこうした医療関係者を含めエッセンシャルワーカーへの感謝を今でも強く感じています。

この朝ドラには、彼らを援助する不思議な紳士、清水卯三郎が登場します。実在の卯三郎は若い頃から好奇心旺盛で、漢学、科学、蘭学、英語などを学び、薩英戦争では通訳を務めました。1867年には唯一の日本人商人としてパリ万博に出展、ナポレオン三世からメダルを授与されています。東京で洋書や歯科材料、医療機器などの輸入を行う瑞穂屋を経営していました。

実際に主人公の2人と関わりがあったかはわかりませんが、今後の展開でさらに関係が深まるかもしれません。

さて、我が国の化学の祖は津山藩医の宇田川榕庵とされ、洋書の翻訳や実験を通じて舎密開宗を著し(1837~1847年)、発案した多くの化学用語は今日なお我々も使用しています。興味深いことにこの卯三郎も、同じく津山藩の蘭学者、箕作秋坪に蘭学を学びました。そして1874年に、T. Tate著“Outlines of Experimental Chemistry”を訳した「ものわりのはしご」(化学入門の意)を発刊し、新たに化学用語を提案しています(炭素「すみね」、水素「みづね」、窒素「むせびね」、酸素「すいね」、結合「むつび」など)。仮名文字の使用を主張する卯三郎の試みは成功することはありませんでしたが、その後も錚々たる学識者らが開設した日本初の近代的啓蒙学術団体「明六社」に参画するなど大衆の教養向上のため尽力したようです。

世界中で戦争が頻発し、鉱物資源やエネルギー問題が深刻化しつつある現在、科学(化学)が世界の人々の日常生活を支える力となり、平和が取り戻されることを心から祈りつつ筆を擱きたいと思います。

(和田宏明)

カラー写真ご提供のお願い

化工誌編集委員会

本誌の目次や編集者の独り言下に掲載するカラー写真を広く会員の皆様からのご投稿をお願いしています。ご投稿いただいた写真は編集委員会で適宜選択して使わせていただければと考えています。ご投稿の際にはごく簡単な説明をつけていただき、電子ファイルの場合には高解像度のもの(300DPI以上)をお送り下さい。

以下のような写真のご提供をお待ちしています。

1. 季節感のあふれた風景・草花・野鳥・動物の写真など
2. 化学に関する写真—カラフルな物質、化学模型、電顕写真、実験機器、化学プラントなど

送付・問合せ：101-8307 東京都千代田区神田駿河台1-5
日本化学会 学術情報部 「化学と工業」誌担当
FAX(03)3292-6319 E-mail: kakoshi@chemistry.or.jp



アメリカキササゲ 務台 潔